

急須で入れたお茶で、ちよつと一福しませんか？

静岡県は言わずと知れた茶どころ。

5月になると各地でお茶の収穫風景をよく目にします。昔からあらゆる場面で飲まれてきたお茶。

近年ペットボトル飲料などが普及したことで、

急須を使ってお茶が飲まれることは少なくなりました。

リーフ茶の良さは何なのでしょう。

今回は、リーフ茶の魅力と一緒に考えていきます。

明治3年に伝わった本市の茶栽培

お茶は世界で最も長い歴史を持つ飲料で、中国では2000年以上前から飲まれていました。日本にお茶が伝わったのは平安初期で、最澄、空海らが唐(現・中国)から薬として日本に持ち帰ったのが起源といわれています。

静岡茶の発祥は、安倍川・藁科川流域の山間部と考えられており、静岡市生まれの聖一國師が、宋(現・中国)から持ち帰った茶種を静岡市足久保にまいいたのが最初とされています。その後、お茶は榛原、周智、磐田へ

と繁殖されていき、本地域には、明治時代に入り牧之原台地が開墾されてから。1870年に丸尾文六が経営する布引原開墾成就のころ朝比奈村小泉原に普及したといわれています。

牧之原、掛川、菊川、川根などの中東遠一帯では、お茶づくりが盛んで、第一次産業の核となしています。本市でも市の総面積の5%にあたる3.4平方メートルでお茶が栽培されています。

現代社会の中に お茶がもたらす時間

近年は便利なものがあふれ、家庭の生活リズムも合理化が進んできました。昔は、多くの家



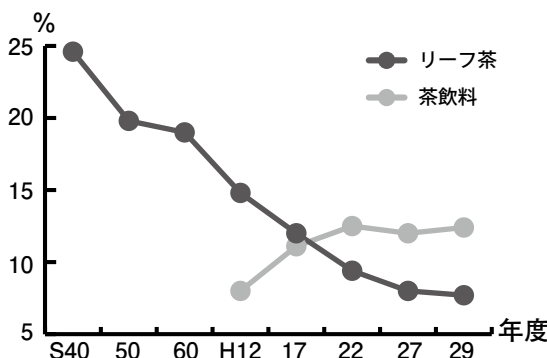
▲つゆひかりカフェでお茶を飲みながら談笑する参加者

庭で急須で入れたお茶が飲まれていましたが、その形態はペットボトル茶などに移行してきています。下記グラフからも昔に比べ、家庭でリーフ茶を購入して飲むことが少なくなっていることが分かります。

リーフ茶の良さは一体何なのか。「つゆひかりカフェ」の1コマにその魅力を垣間見ました。平成21年度から毎年開催されている「つゆひかりカフェ」。市

茶業振興協議会、御前崎つゆひかり普及会が、御前崎ブランド茶「つゆひかり」の消費拡大や認知度向上につなげることを目的に新茶の収穫時期に合わせ実施しています。

世帯の飲料費に対するリーフ茶と茶飲料の割合推移



出典：『静岡県茶業の現状』

(平成30年3月発行／県お茶推進課)

